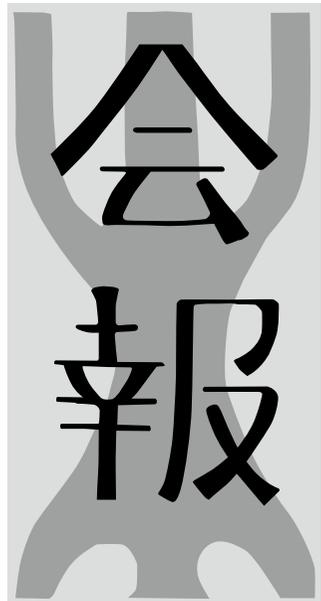


平成30年度第47回

# 北海道・東北地区教員研修会

期日 平成30年10月12日(金)

会場 盛岡白百合学園小学校



日本私立小学校連合会

〒102-0073

東京都千代田区九段北4-2-25

私学会館別館6階

電話 03(3261)2934

十月十二日(金)、「私学ならではの小学校教育の展開」自ら考え、喜んで学ぶ子ども」を研究主題に、第四十七回北海道・東北地区私立小学校教員研修会が、本校盛岡白百合学園小学校を会場に開催されました。北海道・東北地区の加盟校十校の先生方その他、日本私立小学校連合会の小泉清裕会長をはじめ、理事の先生方、各教科の指導助言

「引き受けよう。」そう決断するまで、かなりの時間を要しました。全校児童五十七名の小規模校の本校では、会場校としての運営が難しいのではないかと、先生方に満足していただけるような研修が行えないのではないかと、といった不安要素が多かったためです。話し合いの末引き受けることにしたものの、毎年行われている通常の研修会の形は取れないと判断し、変則的な形態での実施となりました。

## 北海道・東北地区

### 教員研修会を終えて

盛岡白百合学園小学校

総務主任 横山 恵孝



の先生方合わせて百十九名の参加というになりました。研修会当日登校したのは、二・四・五・六年生の児童でした。まず、全校朝礼の様子をご覧いただいた後、本校の特色の一つである英語についての発表を行いました。ジャズチャンツの歌、フォニックスを元にした英文の朗読、イソップ童話を英語で暗誦するなど、

学年カラーが表れた内容でした。先生方からは、「発音が素晴らしいですね」など、たくさんのお褒めの言葉を頂戴しました。研究授業は三教科、四年のみ行いました。二年生(英語)、四年生(英語)、五年生(算数)、六年生(国語)です。社会、音楽、保健体育の先生方には、別の教科の授業をご覧いただきました。

研究授業を行うに当たり、教科ごとに研究チームを組み、全教職員で継続的に研修を重ねて参りましたが、その基軸になっているのが、本校で大事にしていること「表現力」です。本校の教育目標、目指す児童像等から総合的に導き出された焦点を当てるべきポイント、それが「表現力」だったからです。当日の授業では、児童の「表現」する姿が様々な形で見られたのではないかと思います。

午前の教科部会では、研究授業についての話し合いが中心でした。ただし、授業のなかった音楽、保健体育部会は、それぞれの研究主題に沿った内容での研修となりました。社会は、参観した研究授業の教科部会に入っていました。

午後は、始めに全体会を持ちました。日本私立小学校連合会会長の小

泉先生から温かいお言葉をいただき、指導助言の先生方のご紹介をいたしました。その後は再び教科ごとに分かれ、部会を行いました。詳細につきましては、部会ごとの報告をご覧いただきたいと思いますが、どの教科でも先生方の積極的な姿勢、情熱が感じられました。指導助言の先生方からのお話も核心に触れるもの、示唆に富んだものばかりで、目から鱗が落ちる思いでした。また、先生方同士の情報交換やネットワーク作りができたのも良かったことの一つだったのではないかと思います。実り多い、充実した一日となりました。本研修会に関わった全ての皆様に心より御礼を申し上げます。

## 国語部会

### 言葉で表現する

### 力を育てるために

浅沼 勉(仙台白百合学園)

今回の国語部会は、教科を超えてたくさんの先生方に参観していただき



きました。講師には、福島大学教授の佐藤佐敏先生をお迎えし、研究授業や午後からの講演でたくさんのご指導ご助言をいただきました。

午前の部会は、盛岡白百合学園小学校の矢野敦子先生が研究テーマの「言葉で表現する力を育てるために」と会場校の研究授業の基軸「表現力の育成」より、俳句を教材に取り上げていただきました。単元名は、「俳句をつくろう〜区界で見つけた秋〜」です。子どもたちは、宿泊合宿で訪れた区界(くさかい)で感じた五感を

生かして俳句作りを行い、作品を鑑賞し合いました。共に訪れた場所だから分かることに頷き、友達との表現の良さに気付きながら進められ、自然と表現する楽しさを味わっているようでした。矢野先生の受け持たれている国語科では、俳句を作る機会を度々もってられています。学校のまわりや行事など身近なところで気が付いたことを挙げて学びを深めています。そこで必須なのが「言葉ノート」です。普段の生活の中で見つけた言葉や作る過程をメモしながら、一人ひとりが言葉をためています。こうした年間を通して身に付けた語彙のスキルが表現する幅を広げてくれているように感じました。

授業後の検討会では、要項の指導案に掲載されている活動①と②に絞って話し合いをもちました。その中で鑑賞する際に与えていた観点には、手助けにもなるが、考えを制限してしまうのではないかとといった意見や子どもたちが同士で話す場を増やしても良かったのではといった意見が交わされていました。佐藤先生より、子どもたちが体験活動するとき教師が子どもたちの心を耕す手立

てを講じることで、文の表現力や語彙力の向上につながっている。また、事前の細やかな準備を計画的に取り組むことも学級経営ややる気を引き出す大切な点とご助言をいただきました。

午後の部会では、事前に提出いただいた質問に答える形で佐藤先生より表現力を伸ばすための効果的な手立てについて、具体的な例を挙げながら分かりやすく解説していただきました。初めに書く活動の動機付けの一つとして、教材に興味をわくものだと書ける。それに添削して返すなど読んでくれる人がいるという実感が継続したいと思う意欲につながると教わりました。

続けて、「ことばの大切さ」について教えていただきました。同じものでも見方を変えることで幾通りもの言葉で表現することができ、語彙力を高めることで日常生活の言葉も変わっていくことでした。作家論的研究主題から教材を読んでみると主題が変わっていきます。「もちもちの木」や「海のいのち」を例に主題の捉え方を示していただき、本文に即した解釈の説明をお話しいただきました。作品を読み取るなかで、

重要なのがメンダーと呼ばれる展開に関わる重要な人や言葉に注目すると今までと見方が変わるというものでした。

今回の研修を通して、言葉の持つ意味を大切にしながら学習すると、あらゆる場で活用できることを学ぶことができました。一人ひとりの語彙力を高めていくことで心が豊かになり、書く力や発信する力を付けることができ、わたしたちの目指す表現力のある児童を育てることができると感じました。改めて、国語の魅力に気付いた研修内容でした。

## 社会科部会

### 社会科における

効果的な資料活用とは  
子ども達の  
学習意欲向上のために

木村 淳 (郡山ザベリオ学園)

十月十二日に盛岡白百合学園小学校にて「第四十七回北海道・東北地区私立小学校教員研修会」が行われ

ました。午前は国語・算数・英語二クラスの研究授業と事後研究会、午後からは各部会(国語・社会・算数・音楽・保健体育・英語)に分かれての研修会が行われました。

社会部会研修では、各校の授業実践の報告と指導助言者としてお招きした北海道教育大学釧路校教授であり、同大学附属釧路小学校長でもいらっしゃる内山隆先生から、主に新聞活用についてのご指導を頂きました。

### 【各校の実践事例報告】

効果的な資料活用を意識した各校の授業実践報告では、先生方が実際に取り組んだ授業についてのレポートをもとに意見交換を行いました。子ども達の学習意欲を高めるための仕掛けや工夫、資料を提示する順序、比較資料や関連資料のあり方など、様々な視点から、実際の授業をイメージした話し合いを行うことができました。また、批判的思考力(クリティカルシンキング)や違った角度から資料を読み取る力をどのように育んでいくかなどについても話題と

なりました。

教師が準備する資料や提示のタイミングによって授業展開も変わることから、学習内容にあわせて、どのような意図をもって、どのような資料をどのようなタイミングで提示するかが重要であることを改めて感じさせられました。様々な意見を出し合い、アイデアやイメージを共有することができ、今後の授業作りにつながる貴重な学びの時間となりました。



【講師の先生からのご指導】

内山先生からは、主に新聞を活用した授業作りについてご指導を頂きました。具体的事例をもとに、社会科の授業においてどのように新聞を活用していけばよいのか、また、新聞を取り入れることによって育まれる力や学力と新聞活用との関係性などについて、データをもとにお話を頂き、大変参考になりました。授業に新聞を活用していくことで「現実の社会の出来事に関心をもつ」「新聞やニュースに興味をもつ」さらには「記事の事実を根拠にした思考・判断・表現ができる」といった力の向上が期待できます。そしてその力は、課題を見つけ出す力や学習へ主体的に取り組む力、深い学びへとつながっていくものだと思います。

部会後半には、先生がご準備くださったワークシートの形式(新聞から自分が気になる記事、紹介したい記事を見つけ出す。記事を要約する。記事に対する感想を書く。紹介記事からクイズを考える。)に沿って、三々四人のグループにわかれて、実際に新聞作りに取り組みました。他にも、「まわし読み新聞づくり体験」朝のNIEタイム「取材体験」など新

聞を活用した様々な取り組みについて紹介して頂きました。「取り入れられるところから、子ども達と一緒に取り組んでみてください。」という先生のお言葉通り、少しずつでも学校生活や授業の中に新聞を取り入れ、活用していければと思います。今年も北海道・東北の私学の先生方と共に、充実した研修会を開催できたことを、講師、授業者、参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

算数部会

考える力・

表現する力をつける授業

中村 明子 (聖ウルスラ学院英智)

平成三十年度の北海道・東北地区私立小学校研修会は、盛岡白百合学園小学校を会場として行われました。今年度の算数部会は、「考える力・表現する力をつける授業」というテーマで、新たに国立学園小学校教頭の佐藤純一先生を指導助言者としてお迎えしました。午前は、盛岡白

百合学園小学校の神山敦子先生が、第五学年の「図形の面積」の授業を公開くださいました。午後は、佐藤純一先生が模擬授業をなさり、教材についての考え方や指導法についてお話しいただきました。

(二)午前の研究授業・研究協議

研究授業は、「図形の面積」単元の最終段階、発展問題を取り扱いました。「長方形の内部に点を取ってその点と四つの頂点とを結び、色のついた部分の(向かい合う)三角形を合わせた面積を求めろ」問題です。まずは一人一人が題意に合う図形を描いて、具体的な数値を当てはめて面積を求めました。子どもたちは、自分で作図した図形から、色のついた部分の面積は元の長方形の二分の一になることに気がきます。次に「では、いつでも二分の一になるのか、それはなぜか」という問いが生まれます。ペアのグループを作って、ペア同士、また、ほかのペアの計算結果と比較し、どうやらいつでも元の図形の二分の一になるようだ」と気づくことができました。その根拠

を考える作業を次の時間に行うことを約束して授業が終わりました。授業後の研究協議では、主に次の点が話題になりました。

①数値は必要か

この授業のねらいは「色のついた部分の面積は元の長方形の半分になる」ということを、根拠を挙げて説明できるようにすることです。そのねらいからすると、数値を提示することは必要だったのか、ということが



話題となりました。数値があること  
によって具体的に考えられるという  
よい面もあった半面、面積を求めて  
安心してしまい、その先の「なぜ」に  
なかなか関心が向かなかつたのでは  
ないか、という意見も出されました。

## ②発問と子どもたちの思考

ペア学習主体で授業が進行し、全  
体の場で発表することに不安を持つ  
児童も安心して自分の意見を表明で  
きるといふよさがありました。一方  
で、全体で互いの意見を聞きあう場  
面がもっとあってもよかつたのでは  
ないか、という意見もありました。  
指導者が先導すること、児童が自  
ら考えるのを待つことのバランスを  
とる難しさが指摘されました。佐藤  
先生からは、子どもたちから引き出  
すために「どう問うか」、問いの重要  
性についてお話がありました。

## (二)午後の模擬授業と講話

午後の研修は、佐藤先生が模擬授  
業をしてくださいました。数字カー  
ドを使った何種類かの問題、図を描  
くよさを感じさせる問題、模擬授業  
形式ですぐに授業に取り入れられる  
ように工夫してくださいました。そ  
のほかにもいくつかの教材の紹介を  
していただき、これからの授業に生

かしていこうと思いました。また、  
部員からの質問にも答えていただき  
ました。教材に安心するのではなく、  
どういう教材であっても使い方が大  
切である(教材研究が大切である)、  
というお話をいただきました。

## 音楽部会

### 『音楽づくり』で

生き生きと表現活動をする  
児童を育てよう

加藤 いづみ(桜の聖母学院)

今年度は、音楽科の公開授業はな  
く、以下に記す研修内容になりまし  
た。ご指導頂いたのは、東京学芸大  
学教授の中地雅之先生です。研究主  
題「生き生きと表現活動をする児童  
を育てよう」は継続とし、今回は『音  
楽づくり』の分野での研修にしまし  
た。これに向けて、重視したのは、  
児童一人ひとりの音楽に対する豊か  
な感性の育成です。特に主体的・対  
話的で深い学びに向けた授業づくり  
を意識しました。

音楽の公開授業がなかったので、  
普段の授業で感じている悩みや相談  
事などを前もって中地先生にお伝え  
して、午前中はそれに対しての様々  
な指導法やアイデアを沢山頂きま  
した。ここ数年、『音楽づくり』の実  
践が広がりを見せていますが、この  
日は「なかなか教科書だけを頼りに  
授業を進めていくのは難しい」「低  
学年の音楽づくりは、集中力の部分  
から言っても少し難しい」「遊び感  
でありながら自然と音楽に引き込

まれるような導入で、子どもたちの  
表現意欲が高まるようなものはない  
だろうか」などの内容があげられま  
した。

その後、早速、実践を伴う研修に  
入りました。楽譜にとらわれないこ  
と、いろいろ試して失敗する場面を  
つくるプロセルが大切である、とい  
うことで、まずは、中地先生の指揮  
で耳を澄まし、音を感じることから  
始めました。そうすることによって、  
「音は静けさから始まる」ということ

を音楽部会全員で感じることが  
できました。次に、「カルミナ・  
ブルーナ」の作曲家として知ら  
れるカール・オルフが、〈音楽〉  
(動き)へ(ことば)による新しい  
芸術教育を実践した時の貴重な  
当時の映像を視聴しました。そ  
して、改めて『オルフ・シユー  
ルヴェルク』の概要の説明を頂  
き、オルフの教育理念の中心と  
なるのは「基礎的音楽であるとい  
うをはじめ、単純なボディー  
パーカッションや打楽器アンサン  
ブルなど、様々な実践例を交  
えながら、更に詳しい説明をし  
て頂きました。

盛岡白百合学園小学校は、オ



ルフ楽器が揃っています。それを生かしての研修題材ということもあり、午後は、『音楽づくり』『リズム学習』の実技研修になりました。まずは、ウォーミングアップとして、拍を意識してのボディーパーカッション、図形楽譜に合わせての打楽器のアンサンブルと指揮を全員で実践しました。オルフ楽器『シロボックス』『メタボックス』を生かしてのオスティナート伴奏、更にそれを日本音階で活用するなど、五音音階にもたっぷり触れることができました。また、オルフ楽器の特徴である「それぞれの楽器の音域が狭い」「音板が自由に外せる」「バチの選択によって音色の工夫ができるので響きのある音色が得られる」ということをもとに、それぞれの国の伝統的な楽器のうち、音楽教育の理念にかなう楽器を積極的かつ効果的に取り入れることが大切であることを、様々な打楽器に実際に触れながら学ぶことができました。

後半は、色々な旋法(カノン、ペタンコード、教会旋法など)で、一人ひとりが役割を分担して楽器を受け持ち、全員でオルフ楽器演奏を楽しみました。中地先生の用意して下

さったことが盛りだくさんで、プリントの資料だけを頂くことになった内容もありますが、直ぐに授業で実践できそうなものばかりでした。今回の研修会では、実際に身体を使ったり楽器を演奏しながら、『音楽づくり』の奥深さを改めて感じることができ、実りある研修会になりました。

## 保健体育部会

### 運動の喜びを味わわせる

#### 体育指導

～体づくり運動を通して～

細 渕 元 (仙台白百合学園)

今回の研修は、授業公開は行わず、講義および実技研修を実施した。今年も福島大学トラッククラブコーチの菊田明博先生を講師にお迎えすることができた。今年で四年目となる。研修会当日もジュニアオリンピックが行われており、菊田先生がご指導されている中学生が全国で一位と二位を占めるなど、卓越した指導力を

お持ちの名コーチである。

午前中の講義は「走る」「跳ぶ」「投げる」の運動構造と指導コンセプト」と題して、菊田先生から種目ごとにご説明いただいた。

短距離走については、レース局面等の「走り方の指導」と、姿勢や体の使い方などの「動き方の指導」の二つに着目して指導を展開するとよいことを教えていただいた。具体的な内容としては、スタートは「グイグイ」と利用して、スタートは「グイグイ」としっかり地面に力を加えること、加速局面・中間疾走は腰を立てて膝と足首が緩まないように「ポンポン」と弾んで進み、「ピュンピュン」と前足が地面につく前に後ろ足の膝が前に出ていくようにする、などをご指導いただいた。長距離走については、体型や得手不得手を考慮し、「同じ距離」を走る方法だけではなく「同じ時間」を走る時間走を取り入れることで、能力差に合わせた授業ができることをご紹介いただいた。

走り幅跳びについては「何から教えるべきか?」という質問に対して、安心して着地ができる状

態をまず作るべきということで、練習の順番としては、着地技術の習得↓踏切動作・空中局面↓スピードへの対応という流れが望ましいということだった。菊田先生のお話は、現場での指導がベースになっているため、とても実践的で理解しやすい内容だった。

午後の実技研修では、リアクションボールを使いながら、理論と実践双方の講義となった。



「ボールの形がいびつ」という特性

を利用し、頭にボールを乗せた姿勢を維持しながら座ったり、指定されたバウンド数でキャッチしたり、参加者も息を切らせながら、いつの間にか課題解決に向けて没頭していった。菊田先生は「とにかく体をたくさん動かせる運動課題をたくさん構築すること」「教師がやって楽しいと思えるものを、たくさん知っていいこと」の重要性をいつもおっしゃっているが、その意識を常に持ちながら授業を構成していききたい。

保健部会も午前中から各校へ事前募ったアンケートをもとに、情報交換を行った。生活習慣の乱れ、メタルヘルス、アレルギー、性に關すること等、話し合いの内容は多岐に及んだ。問題解決に向けて、学校の保健指導で何ができるのか、保護者が現状を理解してくれるために必要なこと、それに対しての啓蒙活動の必要性を改めて感じた。

どの学校も同じような課題を抱えていることがわかり、改善点を見出すことは容易ではないが、今後、私学という連携をもって、問題解決のネットワークを保ちたい。

研修会を通して得られたものを、参加者が自分流にアレンジし、子ども

もたちが運動することの喜びを体感し、いきいきと学校生活を送れるように更なる研鑽を積んでいきたい。

## 英語部会

### 「Speaking Assessment」

アンドリュウ・ランクシア  
(郡山ザベリオ学園)

今年の研究テーマは、スピーキングの評価にした。スピーキングの評価は、児童の英語力の正確さや流暢さを図らなければならず、非常に困難なものである。英語を学び始めて間もない小学生は、中・高生よりも評価に敏感だということも考慮に入れないといけない。様々なことを考慮して行くべきであるスピーキングの評価について英語部会で考えたという経緯で、この研究テーマに決定した。

今年の会場である盛岡白百合学園小学校では、英語を用いた活動を児童が発表した。英語の歌やストーリーの発表など、英語を教えていな

い多くの教員も、英語の発表を見ることができるといった機会となった。

英語の研究授業は第二学年と第四学年で行われた。第二学年のメアリー・バーキット先生の授業では、一日の過ごし方について、質問し合う活動を行った。1から60までの数字を練習する活動を行い、定着を図っていた。学習内容が定着している児童とそうでない児童とをペアにすることによって、スムーズにペアワークを行うことができた。

第四学年の大石香珠先生の授業では、四技能全ての活動を用い、場所を表す前置詞について児童たちは学習した。児童は部屋の中に物を隠し、友達に隠したものがどこにあるか、前置詞を使って説明する活動を行った。どちらの教員も授業のときにほとんど英語のみで授業を進めており、児童が英語の指示を理解し、活動に取り組んでいる姿が印象的だった。

今年是指導助言者として、宮城教育大学の特任准教授である根本アリソン先生をお招きし、様々なご指導をいただいた。アリソン先生からは、活動をより認知



的に行うための方法をいくつか提案していただいた。例えば、数を数えるときに順番に読み上げるだけでなく、倍数で読み上げたり、英語と日本語を交互に、「one、に、three、よん」のように数えたりする活動がある。活動を考える時に、その活動が認知的であるかどうかという視点が大切であることが分かった。

午後の部会では、各学校でどのようにスピーキングの評価を行っているのかを分かち合う時間をとった。テストの方法や評価の観点について

紹介しあい、自校と他校の共通点や相違点を見つけることができた充実した時間となった。そして、アリソン先生から「なぜ評価を行うのか」「スピーキングの評価がなぜ難しいのか」などの様々な問いをいただき、皆で考える時間をとった。また、実際に三つの学校で行われている評価方法の長所と短所を考える研修を通して、スピーキングの評価をする時に考慮すべき点が見えてきた。

今回の研修で「なぜ評価を行うのか」ということを明確にすること、そしてどのようによりよい評価をしていくかを考えることが大切だと感じた。子どもたちにとってよりよい評価を今後とも考えていきたい。

## 図画工作部会

よさに気づかせるために

奥山 陽介（桜の聖母学院）

今年度の図工部会は盛岡白百合学園小学校および岩手県立美術館を会場とし、八月三日に実施されました。

岩手大学の平野英史先生を講師に迎え、「自他のよさに気づかせる手立てとその評価」をテーマに研修を行いました。

午前中の研修ではテーマをもとにした各校からの実践レポート発表を行い、各実践について協議しました。会場校である盛岡白百合学園小学校、佐藤教諭の表現力を意識した五年生の実践は、「心のもよう」を絵に表す題材でした。画用紙の素材や大きさ、描画材、用具や技法など多様な選択肢を用意し、児童が自分の思いに合わせて自ら選ぶことができる工夫がされており、出来上がった作品も多様性に富んだものでした。評価の観点を明確にし、ワークシートも活用されていました。また、作品だけではなく、制作の過程、児童の様子も適切に見取る工夫として、チェック項目を書いたシートを用意したり、児童のつぶやきも記録する手立てを講じたりしていました。

他の参加校の実践でも、導入、途中、終末など作品を見合うタイミングやその方法を工夫して、互いのよさに気づかせるための工夫がされていました。ただ見せるのではなく、鑑賞の視点を与えたり、他の児童の

作品をその作者になったつもりで鑑賞したりと、毎回同じ鑑賞ではなく、様々な方法で行っていくことで、児童が積極的によさを感じ取ることができるのだと思いました。

指導助言の平野先生からも各学校の実践について助言をいただきました。教師のファシリテート力の必要性、スケッチブックの活用、芸術批評にも技術が必要であること、鑑賞だけでなく題名をつけるタイミングによっても授業の構造が変わってくるなどたくさんのお話を教えていただきました。

午後の研修では、岩手県立美術館に移動し、フィールドワークを行いました。まず、学芸員の方に、常設展の作品を見ながら鑑賞サポートについての話をいただきました。作家の表現の変化、大きさやマチエールなど本物でしか味わえない要素など、鑑賞のポイントやヒントを与えることで、受け身に頼らずに鑑賞できることを教えていただきました。また、普段は見ることができない美術館のバックヤードも見学し、大切な美

術作品を保存・管理するための細かな配慮や、作品が主役であることを意識した美術館のデザイン上の工夫についても知ることができました。

最後に、美術館と学校が連携しアートカードを使って行った本校の授業実践も紹介し、各校での美術館の利用についても話し合いました。

開催されていた企画展「うるわしき美人画の世界―木原文庫より―」も鑑賞することができ、充実した研修となりました。



### 学校紹介

「育てようつなげよう白百合の心」

盛岡白百合学園小学校

校長 高橋 正子

「人間は教育を必要とする、それはまず母の腕の中で始められる。その母を育てたい。」という創立者の志を土台に、建学の精神である「神の前に誠実に生き、真に価値ある女性として社会に奉仕できる人間の育成」を目的とし、盛岡白百合学園小学校は創設されました。本校は盛岡市に県内唯一の私立のカトリック女子小学校として開校し、六十二年目を迎えました。幼稚園・小学校・中学高等学校が豊かな自然環境に恵まれたキャンパス内にあり、一貫教育を行っています。

小規模校の特色を生かしたきめ細やかな教育によって一人ひとりの個性を大切に、持っている可能性を伸ばせるよう全教員が、児童全員の成長に寄り添い、見守っていく共同の指導体制を整えています。

本校の特色ある教育についてご紹介します。○宗教教育を大切にします。朝礼の静かな祈りから始まり、祈りで一日が終わる毎日の生活の中で、神と人々から愛されていることを学びます。かけがえない自分の存在に気づき、受け入れられている安心感が子供の心を自由にし、感謝の心と思やりの心が育ちます。このような宗教的な環境の中で培われる心の教育は本校の教育の中核を成すものです。○特色ある教科学習が充実しています。開校以来、全学年が週二時間の英語の授業を専門の教員が行っています。英語が自然に飛び出す楽しい授業で積極性も身につけてきます。学年の授業の他に全校で歌やジャズ・チャンツ、詩の暗唱を行っています。最近では英語に特化した教育を推進し、英語夏期集中プログラム、多読、英検受験など学年に応じた取り組みもしています。また、他教科においても教員の専門性を生かした教科担任制を取り入れ、継続的な指導により、個々の児童の発達に応じた学習の習得ができるよう配慮しています。○豊かな情操教育が充実しています。縦割り活動による野外体験宿泊学習、自然観察学習、弦楽活動、お茶会、お琴教室など少人数の良さを生かした教育で、自省心、自主性、協調性を育てる学習活動をたくさん体験します。○交流学習が盛んです。幼稚園から高等学校までの一貫校ならではの交流が

様々な場面で行われています。幼稚園の園児と低学年児童のフリークラス活動、年長児と一年生の特別英語活動、老人施設への訪問、幼稚園と小学校合同のロザリオの祈りの体験によって、お互いの交流の輪が広がります。また、高校図書委員による小学校での「お話会」や、六年生と中学生の親睦交流会を通して中学・高等学校との交流は、先輩方と触れ合うことで、白百合学園で共に学び合う仲間としての意識が高まる出会いの場でもあります。



## 平成30年度第43回

## 九州地区教員研修会

期日 平成30年10月19日(金)・20日(土)

会場 沖縄カトリック小学校

## 九州地区教員研修会を終えて

沖縄カトリック小学校

教頭 久田明史

九州地区教員研修会が十月十九日、二十日二日間にわたり沖縄カトリック小学校を会場校として開催された。

毎年十月のこの時期に九州地区私立小学校一四校から二百名近くの教員が参加し、公開授業を中心に学び合う研修会である。

来賓として沖縄県の総務統括監嘉手納裕氏、日本私立小学校連合会からは小泉清裕会長にご臨席いただいた開会式に始まり、会場校の研修の歩みの報告・研究テーマ「活用力を育てる」の説明の後、各教科部会に分かれての分科会へと進んだ。

一日目の分科会は、翌日の授業についての協議の場となる。会場校の研究テーマに基づいた授業内容の把握を、参加者全員が協議を通して行う。各自授業を観る視点を定めることができ、授業者は、児童の学習効

果を高める授業展開を再確認する。互いに研究を深める場となった。

分科会での真剣な研究討議を

終えた一日目の夜は、会場を首里のホテルへと移し、参加者一八〇名が一堂に集う懇親会が行われた。毎年懇親会の際は、九州地区の私立小学校の先生方が年に一度親しく言葉を交わし、共にお互いの存在を大切に感じる楽しいひと時となっている。



今年も沖縄での開催らしく歓迎の琉舞「かぎやで風」と空手の演舞が途中に披露される舞台を観ながら、親交を深め合うことが出来た。懇親会の締めくくりは「九州地区のうた」を参加者全員で歌い、翌日の研修への意気込みを新たにしました。

二日目は九教科の公開授業からスタートした。それぞれの教科部会の先生方が教室に入り、各自の視点から授業者と児童、児童同士の活動の一挙一動を見守る。授業者も児童もいざ活動に入ると周りの先生方は気にならなくなる。普段通りの授業・学習の様子を観ていたことが、これまでの研究を重ねてきた授業者の意図が伝わり、提案した授業の課題も見えてくる。

四五分(図工科は六〇分)の公開授業を終え引き続き分科会Ⅱで授業についての研究討議が行われた。それぞれの教科で教材について、本時の展開や児童の学び合いについて意見が交わされる。司会が意見をまとめ、討議の方向をリードする。指導員の教員が公開授業の中から教科指導や授業展開の重要な点を導き出し、各校の今後の実践に活かせる指針を示して下さる。「教師は授業で勝負す

る」を正に感じさせてくれた真剣な討議がどの教科でもなされた分科会Ⅱであった。

二日目午後の分科会Ⅲは、各教科で創意工夫を凝らした内容が準備されていた。東京や福岡から講師を招いて実践的な指導を受けた教科部会や県内から専門的な分野の講師による講話で見識を深め教師としての専門性を高めた教科部会など充実した研修の場となった。

二日間にわたる研修会は、日本私立小学校連合会小泉会長や事務局を始め、九州地区の先生方、会場校の保護者会の奉仕など多くの方々のおかげにより感謝のうちに無事終えることが出来た。会場校としても、爽りの多い研修会となった。

## 国語部会

「意見の交流」が深まった

授業と分科会

田中 邦俊（別府明星）

「自ら学ぶ力を育てる国語科学習

の探求」という研究テーマのもと、「活用力を育てる」―他者との関わりの中で―という沖繩カトリック小学校の研究テーマに沿って研修が進められていきました。今年度初めて国語部会に参加させていただいた私にとって、すべての分科会がとも学ぶことの多いものとなりました。

一日目は、分科会Ⅰとして、沖繩カトリック小学校の當山先生の提案授業「グラフや表を用いて書く」についてのオリエンテーションが行われました。単元や本時の展開について説明があり、活発な質疑応答が展開されました。資料としてこれまで指導された授業の単元の計画が細かく提示され、明日の授業がとても楽しみにになりました。

二日目午前は、沖繩カトリック小学校の五年生の授業を参観し、分科会Ⅱでは、授業を中心とした研究討議が行われました。

授業では、児童が書いた意見文を友達と読み合い、友だちの意見文がよりよくなるように「いいところ」「直した方がいいところ」を付箋に書いて回し読みが行われました。児童は、交流のポイントをしっかりと確認し、真剣に意見を書くことができ

ていました。教師の話を書くときと友達との意見交流の場面では、とても集中した態度で課題に取り組み姿が見られ、感心しました。

授業後の研究討議では、まず授業者である當山先生の授業を振り返っての反省や指導した意図などが話され、これをもとに、参観された先生方から意見や提案がたくさん出されました。特に付箋の使い方と、時間の有効な使い方について議論が深まり、大変有意義な研究討議がなされました。

最後に敬愛小学校の龍副校長先生から「子どもたちにどんな力があったのか」「書くことについて子どものモチベーションをどう上げていくか」などについて指導助言をいただき、「書く」ことの指導について具体的に理解することができました。

分科会Ⅲでは、初めに福岡海星小学校の福永先生より、全国大会の発表の報告が行われました。久しぶりに参加したことで私学のつながりをすごく感じられたことを話されていました。私は、まだ九州地区の研修会しか参加したことがありません

が、年に一回集まるこの研修会が、とても勉強になり、研鑽がさらに積まれていくことを感じます。そして何より、九州の私学の仲間という意識が年々高まってきて、この研修会が毎年楽しみになっています。

さて、研修会の大きな楽しみの一つが、分科会Ⅲの事例報告や講演、実技研修です。国語部会では、「書くこと」について各校より参加者全員の先生方が、実践事例を持ち寄り、



# 社会科部会

## 社会を生き抜く力を育む

### 授業の工夫

安里 香央里

(沖縄アミックスインターナショナル)

社会科部会の研究テーマは「社会を生き抜く力を育む授業の工夫」でした。

一日目の分科会Ⅰでは、授業者である沖繩カトリック小学校の太郎浦淳一先生に、四年生を対象とした研究授業についてご説明いただきました。首里城の入り口にも掲げられて



三人、四人のグループに分かれて、ワールドカフェ方式で一人7〜8分実践事例を発表し、質疑応答を行い交流することができました。同じような指導を行っている学校もありましたが、各校のきめ細かな指導を聞いて、大変参考になりました。

二日間を通して多くの人と交流を深めることができ意義深い研修会となりました。

いる「守礼之邦」を取り上げ、沖縄は昔からおもてなしの国とされ、現在もウエルカムんちゅという言葉があり、そのおもてなしの文化を取り入れ、琉歌で締めくくりたいと話していました。

二日目の授業研究の単元は、四年「わたしたちの県のまちづくり」でした。那覇空港のインフォメーションセンターで観光案内を聞いているかのような雰囲気でも子ども達が、案内グループ(情報提供)とプラン作成グループ(情報収集)チームに分かれてまち案内の情報を紹介していまし

た。観光地の多い沖縄を、四つの地域(南部、中部、北部、離島)に分かれ、それぞれの場所で観光案内カードに上手にまとめ、情報を提供していました。観光カードの数の多さに、事前準備がしっかりできていたことが窺えました。

分科会Ⅱの研究討議では、子ども達のグループ活動の様子や観光案内カードの内容などについての意見交換が積極的に行われました。指導員の富田健一郎先生(福岡海星)は、①資料活用がテーマで気温や降水量のグラフがあること。②沖縄を四か所(南部・中部・北部・離島)

に分けるのではなく、二か所に絞った方がもっと情報が引き出せ、集めた資料の中から比較検討が出来たのでは。③一人で二、三か所調べるのではなく、一か所をとことん調べさせ主体的に調べ上げる。④人物を取り入れ、インタビュをする。とさらにいいのではと指導助言がありました。社会科部会担当理事の山田耕司校長先生(福岡海星)は、新学習指導要領は①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③学

び合う力、人間性等Ⅱアクティブラーニング、情報を集める力↓選択する力↓加工する力↓まとめる力が必要だとのお話がありました。また、地理的条件(立地条件)即ち、自然条件(気候、降水量、土壌、地形、資源)と社会条件(市場、労働力、技術、歴史、交通)を入れることが必須であると話していました。そして、社会科の先生は、歩かないといけない。自分が知っていれば、子ども達を動かすことができる。苦勞した足跡は残る。児童の記録は常に残しておく、ポートフォリオは必要不可欠であるとまとめられました。

第三分科会では、琉球弧世界遺産学会副会長の盛本勲先生による、世界文化遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」と琉球史についての講話がありました。観光立県沖縄県で世界遺産をどう活かしていくか、オーバーユース(過剰利用)などの諸課題があり、観光・共存のルールづくりが大切だということも学びました。二日間の研修を通して、研究テーマである「社会を生き抜く力を育む授業の工夫」について考えるよい機会となりました。

## 算数部会

### 算数部会に参加して

土屋 直子

(沖縄アミックスインターナショナル)

十月十九・二十日に沖縄カトリック小学校で行われた九州地区教員研修会。私は算数部会に参加しました。研究テーマは「自ら学ぶ楽しい算数にするために」で、九州各県から集まった先生方と非常に内容の濃い研修をすることができました。

一日目の分科会では、翌日の研究授業の指導案について話し合い、授業者の意図を聞いたり授業観察のポイントを事前に絞ったりして翌日に備えました。この分科会があったからこそ、翌日の授業研究後の学びがより深まったのだと思います。

二日目は、六年生の「速さ」の授業でした。クラス遠足で地域の公園へ行く、という設定で、所持金三百円をどう有効に使い自分達の目標を達成するかを考え計画するというグループ活動です。各グループから

様々なアイデアが出てきていました。公園で遊ぶ時間を多く取るため所持金を使いバスに乗ることを決め、時速と距離を測りながら乗るべきバスを選択しているグループ。公園でお菓子と飲み物を買うために節約して徒歩で行こうと決め、以前の授業で測った自分達の歩く速さを使い所要時間を計算しているグループ。それぞれのグループがしっかりと話し合い、「速さ」や「拡大図と縮小図」などの既習事項を大いに活用しながら活動を進めている児童の様子に感銘を受けました。

今回の研究授業を通して一番感じたのは、授業の中で活きている普段の学級経営の力です。担任の山城先生とクラスの児童は強い信頼関係で結ばれていました。児童の声をひろいながら大切なポイントを押さえる授業形態は、算数だけでなく普段の活動で日常的に行われているのが伝わってきました。また、お互いの意見を尊重し共有しながら、ひとりも残すことなくきちんと授業参加をしている姿も印象的でした。聞き合う活動、伝え合う活動を普段から行う大切さを改めて感じさせてもらったよう

に思います。「授業を作るのは学級経営の力」だと、自分自身も肝に銘じてこれからの学級作り、授業作りに邁進していきたいと思えます。

授業後の分科会では、授業の振り返りを中心として研究討議が行われました。児童の様子を近くで観察していた先生方からは非常に的確で興味深い意見が飛び交い、それぞれが今後の授業に活かすヒントを持ち帰れたような気がします。また、その後の小グループでの話し合いでは、ICTへの取り組みや新指導要領へ

の対応など、各校の様子をたくさん聞くことができました。テーマだけに留まらず、お互いの学校での進捗状況を聞き合うことで、自校を振り返り学びを深める機会となりました。

十年ぶりに行われた沖縄での九州地区研修会。暖かい気候の中、多くの先生方と学び合い、深い繋がりを感ずることができました。開催校の沖縄カトリック小学校の皆様と、算数部会の役員の皆様から感謝申し上げます。貴重な学びをありがとうございました。

## 理科部会

### 活用力を育てる授業

加納 秀樹 (明治学園)

さわやかな十月の青空のもと、第四十三回九州地区教員研修会が、沖縄カトリック小学校で行われた。今回の授業者は、伊藤祐介先生。「活用力」を育てることで、「おもしろい理科」の授業をつくる実践を提案し





て下さった。単元は三年生の「ものと重さ」で、塩と砂糖と砂の重さには違いがあるのかを、子どもたちは探求していった。

沖繩カトリック小学校の子どもたちは、みんな実に素朴であった。いささか緊張気味の伊藤先生をしり目に、いつもと同じように活発に活動していた。理科室に移動してくると、すぐに教室前の動物飼育のコーナーに行つて、

「カメが脱走した。」「大丈夫、大丈夫」と優しく動物に接していた。

九時、挨拶とともに授業が始まる。先生の指示のもと、子どもたちが実験器具を準備したり、予想を書いたホワイトボードを確かめたりしていた。いよいよ実験による確かめが始まる。けれども、自分たちの予想の記述に満足していないのか、まだ一生懸命に話し合いを続けていた。先生の声掛けで気持ちを切り替えて、実験に取り掛かる。実験の際に砂糖をこぼした子どもがいても、

「いいよ、いいよ。」

と沖繩訛りで優しく冷静に対処していた姿が印象的であった。

いよいよ実験が始まる。子どもたちは「砂」「食塩」「砂糖」の重さを比べ始める。ここからが伊藤先生の考えた「活用力」を発揮する場面である。実験をしながら、子どもたちは、お皿に入れる量について、

「スプーンは一杯かな。」

「山盛りはだめじゃないの。」

と、自然発生的に子どもたちは条件を整えることに気づいていった。

授業中盤、最初のまとめである。およその正しい結果は出てきたが、みんなが同じ結果になっていない。先生がすかさず、子どもたちに疑問を投げかける。

「どうして、同じ実験なのに結果が違ふの。」

子どもたちは一斉に、

「体積を同じにしたらいいい。」

とつぶやき始める。伊藤先生が、

「じゃあ、体積をそろえてやってみようか。」

と子どもたちに働きかける。一度目の実験で失敗したことを「活用」して、子どもたちは二度目の実験に挑んでいった。二回目の結果はどの班も同じ結果になっていた。

伊藤先生は一時間の授業の中で「活用」するものを見つけ出し、それを実際に「活用」する授業を提案して下さった。「活用」には、生活経験を活用する方法、今までに学習したことを「活用」する方法がある。今回の伊藤先生の提案は斬新なものであった。

授業前は、時間内に終わるだろうかと心配の声もあったが、最後まできちんと予定通りに進んだ。先生の技量もさることながら、先生と子どもたちの関係が良好だからこそ、今回の授業が成功したという意見も多かった。沖繩カトリック小学校の先生方に、多くのことを教えて頂いた、二日間の研修会であった。

## 生活・総合部会

生きる力を育む生活・総合  
授業研究と講話を通して

市川 千恵子

(沖繩アミックスインターナショナル)

生活・総合部会では、沖繩カトリック小学校の大城先生による授業研究発表(第一学年)が行われた。「ムーチー博士になろう」と題した授業では、児童が普段お世話になっている六年生の児童を迎えて行う「ムーチー(沖繩の伝統行事)パーティー」にむけた準備に取り組んだ。沖繩カトリック小学校では全校で「他者とかかわりの中で学ぶ」ことを目標としており、今回の授業でも半数の児童が準備したブースに分かれ、自分たちの調べた「ムーチー」についての発表を行い、半分の児童が六年生役となって各ブースを訪れた。そこで、六年生役の児童が各ブースの児童にアドバイスを与え、それを受け取った児童はさらに良い発表にするためにはどのような改善ができるか

を話し合った。ここに「他者との関わりの中で学ぶ」活動があり、初めはアドバイスのやり取りができなかった児童も、大城先生の呼びかけで徐々に意見の交換ができるようになった。授業研究発表後の討議でも、このアドバイスのやり取りに関して活発な意見交換がなされた。そもそも「アドバイス」とはどんなものなのか？一年生の児童がどこまで理解しているのかを確認する必要性や、全員が主体的に意見交換を行う方法を、日々の積み重ねの中で確立していく大切さなどが議論された。

続いて、講師の津川先生(福岡教育大学教授)より、生活・総合における①新学習指導要領の変更点②教材開発③ICTの活用、以上の三点に関してお話しいただいた。これらのお話の中で、

○指導要領の内容に大きな変更はないが、若干の文言の変化はある。大切なことは、教員間での共通理解。これに限らず、言葉に対する理解の違いは教員間、また教員・児童間で存在するものであり、その確認は非常に大切な作業である。  
○生活科は変わらず「スタート・カリキュラム」としての位置づけを持つ。



私学の多くが幼小一貫また小中一貫の環境を持っている。総合の時間も含め、私学としてその独自性を生かし、一貫性を持った連携を模索する必要がある。  
○インターネットにより、自由に情報が得られる現在、問題意識をもつことが一層重要となっている。ファクトチェック、根拠をもとに自分の

考えを持つこと、インターネットに頼らずに情報を得るサバイバル能力も見据えた教育が必要となっている。  
これらのことが非常に印象に残った。津川先生の「難しく考えなくてもいいですよ」という優しいお言葉に励まされつつも、生活・総合の持つ役割と可能性の大きさに身の引き締まる学びの機会であった。

## 音楽部会

子どもが生き生きとする  
音楽学習をめざして

稲垣 宏晃

(沖縄アミックスインターナショナル)

今回の音楽部会の研修内容は、鑑賞の研究授業と三線の実習でした。一日目は授業者の長嶺洋美先生(沖縄カトリック)を中心に、指導案をもとにした話し合いが行われました。ヘンデル作曲「水上の音楽」の一曲アラ・ホーンパイプを鑑賞して、音楽の構成要素や楽曲の構造に気づく

くことが題材の目標です。指導案の改訂版が配られ、要綱に掲載された元の指導案から削除された部分などについて参加者からの質問が上がりました。  
秋晴れの気持ちの良い朝、二日目の研究授業が始まりました。窓の外には沖縄の青い空が広がり、音楽室には子どもたちの伸びやかな歌声が響き渡ります。歌い進める中で、長嶺先生から「この歌はどんな声がか合うかな」という問いかけが。このたった一言の問いかけで子どもたちが、楽曲の特徴などを考えて歌う主体的な活動に転換したように感じました。続いて本時のメインの鑑賞です。曲のはじめの部分を聴いてどんな楽器が出てくるか子どもたちに尋ねます。子どもたちの答えを聞いて長嶺先生は用意していた楽器のイラストを黒板に貼っていきます。次に、トランペットとホルンに着目して音色の違いを聴き分けます。トランペットが演奏しているときはトランペットの構えをして、ホルンになったらホルンを吹く真似をします。子どもたちは的確に聴き分けていました。本時の最初の目標はすんなりと達成です。第二の目標の「旋律を聴き取

る」も難なくクリア。第三の目標「問いと答えや音の重なり面の面白さを感じ取る」では、トランペットとホルンの音について、言葉や色、形、人などに例えるなどのように感じるかをワークシートに記入しました。トランペットとホルンの掛け合いを聴いてイメージした光景についてファンタジックに述べている子どもの姿も見られました。引き続き行われた研究討議では、指導員の河野政孝先生(明治学園)からは本時ではおさえきれなかった目標に迫るための次のアドバイスとパロク期のホルンについてのお話がありました。

—m程のゴムホースの両端に漏斗とマウスピースをつけた即席の手作りホルンを吹くと、参加者から驚きの声が上がりました。講師の石垣真秀先生(沖繩カトリック中高)からは、活用力を育てるための手立ての一つとして他の教科と関連を図った指導で学びを統合させることが大切であるとお話がありました。担当理事の上村もと子先生(明星)からは、教師が示した基本的情報を基盤として音楽的な要素を関連付けて学ばせるといふ鑑賞の授業の雛型が示されました。学び方(楽曲のどんなところを

を聴けばよいのか)を学ばせることで、生涯にわたって音楽を愛好する子どもを育てることができるといふ上村先生の言葉に目からうろこが落ちた思いがしました。

昼食をはさみ、石垣先生による三線実習です。基本的な奏法や調弦の仕方、一見難解に見える楽譜の読み方など、丁寧に解説していただきました。収穫の多い二日間でした。

### 図工部会

**音を色と形に変換して表し、自分と友達を感じ方や表し方の違いを知る(鑑賞)**

馬場 豊(精道三川台)

図工部会では、「つくり出す喜びを味わい、ともに学び合う」を研究テーマとして、沖繩カトリック小学校の矢澤聡先生が、二年生で「オートノイロ、カタチ(鑑賞)」の授業を行いました。この題材は、音を色と形に変換して表すことを通して、自分と友達を感じ方、表し方の違いを知

る鑑賞の授業です。教室の様々な場所を叩いてみて感じとったものを、画用紙に色紙を切り貼りし、音の色と形に表していきます。これらの活動を通して、見る方も見せる方も思考、判断、表現を伴う主体的な鑑賞活動となることをねらいとしています。

授業が始まると、矢澤先生は二年生の子供たちを自分の周りに集め、静かに子供たちへ語り掛けました。「今日は身の回りの音に色と形を与える授業だよ。」「どんな音が聞こえるかな?」「子供たちは音に意識を集中させ、そこから色と形へと想像を膨らませていきました。全体で学習内容を確認後、いよいよ個人活動です。

授業後半では教室全体や廊下にも活動範囲を広げ、子供たちは活発に音を探し回り、色紙を切り貼りしながら色と形に表していきました。中には、これまでの経験を元にイメージを膨らませて色や形に表す子供もいるなど、一人ひとりが自分なりの思いや考えを元に主体的に活動に取り組んでいました。また、活動中は一人

ひとりの想いや考えを大切にしながら子供と接する矢澤先生の姿が印象的でした。

第二分科会では、授業を中心とした研究討議が行われました。討議では、「二つの音を元に子供同士意見を出し合うことで、互いの見方や考え方を共有できたのではないか。」「学習課題を目視できるような板書の工夫があればよかった。」「振り返りシートがあればいいのではないか。」「などの意見が出されました。一方で、音を色と形に表すのは二年生にとつ



て高度な題材でしたが、この課題を子供たちが乗り越えられたのは、ひとえに矢澤先生の日頃の指導の積み重ねがあつたことでした。それゆえ、六年間を見通した系統的な指導計画の重要性を再認識しました。

第三分科会では、東京学芸大学附属世田谷小学校の大櫃重剛先生を講師としてお招きし、図工科指導の在り方について、新学習指導要領との関わりと関連付けながらお話し頂きました。授業において子供たちに何を学ばせたいのかのねらいをはっきりとさせ、意図的に学びの環境を作ること。その環境の中で、子供が意思をもって自由に決定することの重要性について、ご自身の指導経験を交えながらわかりやすく説明して下さいました。また実技研修の「アイスクリームたべたいな」「マジカル・ミラーワールド」では、子供の想像力を掻き立てる楽しい実践を紹介して頂きました。これらのお話や実技内容は、新学習指導要領とも深く繋がっており、今後の指導に大いに役立つものばかりでした。

二日間にわたり学び合い、時に熱く語り合い、大変有意義な研修となりました。

## 保健体育部会

わかる できる

### 楽しい体育の授業

吉谷 朋己（沖繩カトリック）

「わかる できる 楽しい体育の授業」の研究テーマに加え、本校の研究テーマである「活用力を育てる」他者との関わりの中で「の考えをもとに研究を続けてきました。そして今回の九州地区教員研修で、本校の崎濱美智枝先生が四年生を対象に授業してくださいました。

ここ数年、本校の運動会で四年生が、「リズム空手」という崎濱先生がお考えになった音楽に合わせながら空手を演武するという演目を行っています。運動会を二週間後に控えた中での今回の授業発表でした。まだ練習段階ではありましたが、実際に曲を流しながら空手を披露する児童たちをみて、難しい空手の形も曲に合わせることで覚えることができると。また、対人で行う組手の難しいポイントであるタイミングを合わせ

る。という点においても、スムーズに児童たちが修得できるということを感じた先生が多かったのではないのでしょうか。

今回の授業では、運動会の発表演武にもある「約束組手」の中で、対人的技能の知識や技能を身につけた児童たちが、正しい力を発揮できるかどうかというのがポイントでした。約束組手は、実際に攻撃するわけではなく寸止めである上に、お互いにどんな攻防をするかを把握している状態で行う。その中でピタッと動きを合わせ、なおかつキレの良い動きをするためにはどうしたらいいのか。実際にやりとりをしている児童を見てみると、音楽があつた時のように上手くないかない部分があり見受けられました。グループに分かれ、その上手いかない部分を互いにアドバイスし、授業のはじめに示した本時のめあて「正しい力を発揮する」を、児童たちは達成しよう」と取り組んでいました。

授業の最後のふりかえりの時間には、児童から「具体的にどこに気をつけてやったら上

手くいった」という声がありました。また、「この授業を通じて最初よりも上手になった」という声も児童から聞くことができました。児童がめあてに対して達成感を感じることができたというのは、非常によかったのではないかと思います。

分科会Ⅱで、ふりかえりはカードに記入させる。もしくは、表現のふりかえりならビデオ撮影してもよかったのではないかと意見がでました。分科会Ⅲの実技研修で、自分の動きを実際に撮影していただき



## 英語部会

### アウトプット力を高める

#### 授業展開

松尾 星璃佳 (敬愛)

英語部会では、「コミュニケーション能力を高める授業の工夫」を研究

みてみると、改めて自分がどのよう  
に動いているのかわかりません。児童た  
ちにもこういった気づき、ふりかえ  
りの時間を提供していきけるように授  
業づくりをしていこうと思いました。  
九州地区教員研修会に初めて参加  
させていただきましたが、指導員の  
森先生の的確なご意見をはじめ、先  
生方のあらゆる視点でのご意見を聞  
くことができ、非常に有意義な時間  
を過ごすことができました。  
また、年に一回ですが、こうやっ  
て同じ志しを持つ仲間が集まること  
で、「また頑張ろう」と思うことが  
できることも知ることができました。  
ありがとうございました。

テーマとして、沖縄カトリック小学  
校の嘉手川ゆうき先生とJimmy  
Cummins先生が、一年生を対象  
とした授業を展開されました。

研究授業では、「Let's make a  
party table!」という単元のめあて  
において、沖縄カトリック小学校英  
語科の研究テーマ「インプットした  
学習内容や知識を英語で考え、判断  
し、コミュニケーションの手段とし  
て役立てることのできるアウトプッ  
ト力を育てる」という視点や、コミュ  
ニケーションを円滑に行う手段とし  
て、表情や身振り手振りを交えて表  
現するというねらいも設定されてい  
ました。

授業は、フォニックスの復習と  
「Do you like ~?」「Yes, I do. /  
No, I don't.」のパターン練習で前  
時の振り返りをし、その後班員で協  
力してパーティテーブルを完成させ  
るグループワークをするという流れ  
で展開されました。フォニックスの  
復習では音と文字の関係を、発音練  
習、音と文字とのマッチング活動、  
英単語で確認をしていきました。子  
どもたちはとてもスムーズに、か  
ら、o、までフォニックス活動を行  
い、日頃の授業でのトレーニングの

成果が感じられました。「Do  
you like ~?」の質問に対する  
答え方練習では、答え方のパ  
ターンをしっかりと答えるこ  
とができていただけでなく、  
「Yes, I do.」の時は明るく大き  
な声と笑顔で、「No, I don't.」  
の時は暗い表情をつけたり首  
を振ったりするなどのジェス  
チャーも含めて、自分の意見を  
伝える練習に励んでいました。

最後のグループワークでは、初  
最後のグループワークでは、初  
最後の班活動にもかかわらず、  
子どもたちは説明されたルー  
ルをきちんと守りながら、積極  
的に学習した表現を使って

パーティテーブルを作り上げていき  
ました。全員が「Yes, I do.」と答え  
ただけのテーブルに飾り付けら  
れるというルールのため、班によっ  
ては物があまりそろわないところも  
ありましたが、目標とする表現をた  
くさん使い、自分の意見をきちんと  
伝えることができた成果であると思  
います。

授業後の討議では、前時の復習や  
パターン練習をトレーニング的に積  
み重ねることの大切さや、学んだ表  
現を使う場面をきちんと定めること



の効果について意見を深めることが  
できました。また、子どもたちが自  
然に英語でコミュニケーションをと  
る機会としてのアウトプット活動の  
重要性についても再確認できまし  
た。今回チームティーチング形式の  
授業として、二人の指導者がリズム  
を崩すことなく役割を交代しながら  
授業を進行していく形を学ばせてい  
ただくことができたと同時に、また、  
たくさん褒め言葉をちりばめなが  
ら授業が行われており、子どもたち  
が先生方を慕い、楽しく安心して授

業を受けることができる環境づくりがなされているとも感じました。今回の研修で学ばせていただいたことを、今後の授業指導に生かしていきたいよう日々精進していきたいと思えます。

## 養護教諭部会

### 色彩心理から見る児童理解

松本 裕子（福岡海星）

毎年、「養護教諭部会」を夏に開催していますが、今年は秋に開催されている九州地区教員研修会の同日程で沖縄カトリック小学校を会場校とし、沖縄の先生方と研修を行うことができました。

第一日目は、各校が抱える課題を情報交換しました。どの学校も発達障害の懸念のある児童を抱え、対応に追われていました。学校内に「特別支援教育」の組織があり、その中の養護教諭の役割などを分かち合いました。学校長を中心とした組織構成や職員との連携、スクールカウ

ンセラーの配置、専門機関との連携など、学校によって組織構成は異なりますが、養護教諭としての役割は、多様化しています。そのため、組織の連携・協力が必然的に必要になり、組織づくりが大きな鍵となります。組織を円滑に運営することが、子どもの理解・支援に繋がりがり、子どもの将来を見据えた援助ができます。

第二日目は、沖縄市立教育研究所教育相談員の渡名喜早苗先生を講師にお招きし「色彩心理から見る児童理解」と題し、参加型の研修を行いました。「キュービックカラー」「カラーメンタリング」「パステルアート」の三つを体験しました。

「キュービックカラー」は、十色の色のキュービックから好きな色を左手で五色を選び、十字型の型にはめていきます。選んだ色や順番がその人の過去・理性的な感情・現在・潜在意識・未来の心の状態を読み解くシンプルな色彩心理学です。このキュービックを日常的に使うことにより、コミュニケーション能力が向上し、身近な人間関係はもとより、社会的人間関係もスムーズになります。分析心理学「投影法」による順番や塗り方、色の変化を組み立ててい

くことで得られる色のエネルギーを読み解いていく、オリジナルのメゾットです。渡名喜先生からこの方法を教育相談に活用し、不登校の児童が自ら、心の状態を知りコントロールできるようになった実践例を聞き、「色」の持つエネルギーや特性が自己実現力を与えたのだと感じました。

アメリカの心理学者マズローによると、人の欲求はⅠ生理的欲求、Ⅱ安全の欲求、Ⅲ所属と愛の欲求、Ⅳ承認の欲求、Ⅴ自己実現の欲求の五段階に分けられ、低次の生理的・安全の欲求が満たされて初めて、より高次の欲求が活性化すると述べています。この欲求は、人の成長にもあてはまらず、子どもの生活基盤が満たされて初めて自己実現に向かうことができます。ⅠからⅣの欲求は一度十分に満たされた経験があると、その後の人生で多少足りないことがあっても耐えることができると言われています。

人が成長し、満たされた人生を送るためには、生理的・安全の欲求が満たされ、十分に愛されているという経験が必要です。

色彩心理は、欲求段階のⅢからⅤに効果を発揮します。周囲の人との関係を持ち、認められることにより、社会的欲求が満たされ、自信になり、自分の能力を発揮したいと考えるようになるのです。

今回の研修を通して、沖縄の先生方と課題を共有し、色彩心理を体験できたことは、大きなお恵みでした。研修で学んだことを持ち帰り、子どもの心理理解のために活用したいと意欲が湧きました。



## 学校紹介

「宜野湾市で頑張っています」

沖縄カトリック小学校

校長 夏見隆晴

二〇一八年度の九州地区私立小学校教員研修会を、本校で開催させていただきました。遠隔の地であるにも関わらず、多くの先生方にご参加いただきました事、嬉しい限りです。加えて、会長先生より「学園紹介」との温かいお言葉をいただきました。目を通していただければ幸いです。

本校は、保育園・幼稚園から中等高等学校までの一貫教育の中で、人間教育を実践することを目標としています。わたし自身も、中高のみの校長時代から、幼稚園児に絵本の読み聞かせや、小学生と一緒に遊ばせてもらっていました。そうした至福の日々が、今日も神の恵みと

感謝しています。一人一人の子供の笑顔を見られることが私の喜びです。

さて、今回、十年ぶりに教員研修会を開催させていただきました。私共にとつては本当に嬉しい機会でした。校舎も新しく、また大きくもなり、何よりも、児童数と教員の数が増え、でも家庭的な雰囲気の中、従来通り「子供と共に」の伝統を、今後どのように継承して行くかを、大課題としています。しかしそれも全保護者のご支援で、乗り越えることが出来たと、私たち皆、確信を持っております。私どもの学校名称が沖縄カトリック小学校とありますように、母体にはキリスト教カトリックのドミニコ宣教師道会の存在があります。シスター方の人々への奉仕の精神が、この学園に学ぶ児童と教職員の間に行き渡っており、教育全体を効果的に良い方向へと導いてくれていると信じ、活動の源としております。

又、校長として嬉しく感じているのは、当然の事とは言いながら、教員が丸となって教育のレベル向上に取り組んでくれていることです。

私学は、常に子供達がより高みを目指して学ぶところ、と思えるような教育を提供できなければ、存在の

価値そのものが薄れて来るのではないかと考えています。そのためには、子供達の好奇心を引き出せるような授業内容を、常に提供できるように先生方を支援できればと、わたし自身も、研修に励んでいるつもりです。

校長は、常に先生方と共にあり、先生方から、今子供達が何を考えていて、何を望んでいるかを教えてもらい、教育の改善に日々努力すべきだと自戒しております。学校は、卒業生にとつては永遠に母校であり続けなければと自戒しております。

保育園から数えれば、学園で過ごした年数が十五年以上にも及ぶことを考えると、子供達の受けた教育に対して、私たち教職員が負っている

責任は、非常に重いものであると言えます。幸い、私たちの学園は、キリスト教カトリックの教えを根幹としております。宗教の時間には、専任の教師が、倫理観や宗教観を説き、朝礼や終礼では、子供達の歌う聖歌の音が響き渡ります。その声は、子供達からの神様へのお願いとして、イエス・キリストの元へと届いていると信じております。

最後になりましたが、遠い所をご参加いただきました先生方、本当に有難うございました。私どもの方が学ぶことの多かった研修会でした。諸先生方からいただいた教えを、今後を生かしてまいります。感謝。



## 2019 年度 日私小連研修会日程表

(平成 30 年 12 月 28 日現在)

研修会	実施回数	集録番号	期 日	場 所
西日本地区	61	417	2019 年 5 月 24 日 (金)	香里ヌヴェール学院小学校 (大阪府)
東京地区	56	418	2019 年 6 月 7 日 (金)	白百合学園小学校 (東京都)
全国教頭	43	419	2019 年 8 月 21 日・22 日 (水・木)	新横浜グレイスホテル (神奈川県)
全国夏季	63	420	2019 年 8 月 19 日～21 日 (月～水)	新横浜プリンスホテル、他 (神奈川県)
北海道・ 東北地区	48	421	2019 年 10 月 11 日 (金)	聖ウルスラ学院英智小・中学校 (宮城県)
九州地区	44	422	2019 年 10 月 18 日・19 日 (金・土)	長崎南山小学校 (長崎県)
関東地区	61	423	2019 年 11 月 16 日 (土)	洗足学園小学校 (神奈川県)
全国幹部	64	424	2019 年 12 月 5 日～7 日 (木～土)	新横浜プリンスホテル (神奈川県)

### 日本私学教育研究所と共催の初任者等研修会

研 修 会	期 日	場 所
初任者研修地区研修会		
小学校 (東日本地区)	2019 年 7 月 29 日～31 日 (月～水)	アルカディア市ヶ谷 (東京都)
小学校 (西日本地区)	2019 年 7 月 31 日～8 月 2 日 (水～金)	大阪ガーデンパレス (大阪府)
初任者研修全国研修会		
小中高校 (東日本)	2019 年 10 月 11 日・12 日 (金・土)	主婦会館プラザエフ (東京都)
小中高校 (西日本)	2019 年 10 月 25 日・26 日 (金・土)	京都ガーデンパレス (京都府)
中堅教員 (10 年経験者等) 研修会		
小中高校 (東日本)	2019 年 7 月 23 日・24 日 (火・水)	主婦会館プラザエフ (東京都)
小中高校 (西日本)	2019 年 7 月 26 日・27 日 (金・土)	京都ガーデンパレス (京都府)

東日本地区は (東京地区と北海道・東北地区と関東地区)、西日本地区は (西日本地区と九州地区) を含む。

## 2010年代の教育宣言

今や、地球規模で激動する2010年代を迎えました。私たち私立小学校は、著しい社会変化と科学技術の高度化が進展する時代の中で、建学の精神を継承するとともに伝統を重んじ、その使命とする理想の教育をめざし、誇りをもって初等教育の先駆的な実践を世に問うてきました。

21世紀は「知識基盤社会」の時代であるといわれています。その一方で「心」の時代でもあります。私たち私立小学校は、個人の自由と人権および児童一人一人の個性を尊び、その内なる可能性を児童愛をもって引き出す方法を実践・探求し、未来を切り拓いていく基礎的資質と心豊かな人間性を育成します。

併せて、真の世界平和と持続可能な自然環境の維持のために、広い視野をもって考え、共感する力を身につけた児童を育成します。

そのため、私たち私立小学校は、伝統と特色ある教育をさらに充実させ、私学人としての自覚に立ち、お互いに協力結束し磨き合い、わが国初等教育の新たな創造をめざすことをここに宣言します。

2010（平成22）年6月11日

日本私立小学校連合会